

〈2〉ロシア・ウクライナ戦争の2月初旬時点での情勢と見通し

渡部安全保障研究所 所長 渡部 悦和

序言

筆者は CISTEC journal の No.213 に論考『ウクライナ・ロシアの軍事情勢の現状と今後の見通し』(対象期間 2024 年月から 2024 年 7 月まで)を寄稿したが、本稿はその続編である。本稿においては、2025 年 2 月初旬までの戦況を基にしてロシア・ウクライナ戦争(＝ウクライナ戦争)を分析した。

本稿の対象期間は 2024 年 8 月から 2025 年 2 月初旬である。対象期間における注目すべき事態は昨年 8 月 6 日に、ウクライナ軍が実施したロシアのクルスク州に対する奇襲的な攻撃(クルスク奇襲攻撃)である。ロシア軍はこの奇襲攻撃に対して適切な対応ができず、8 月 12 日の段階で約 1000 km²の領土を占領されてしまった。クルスク奇襲作戦は、ウクライナ戦争の転換点になった。越境攻撃はある程度成功し、ウラジーミル・プーチン大統領にショックを与えたことは確かだ。攻撃から 6 カ月経過した 2025 年 2 月初旬時点でもウクライナ軍は排除されずに生き残っている。

しかし、クルスク奇襲作戦を実施したために、ドネツク州などの他の戦場においてウクライナ軍は苦戦し、着実に国土を失い、ますます深刻な兵士不足に直面し、その防御態勢は危機的な状況にある。

「ロシアには領土を譲らない」と長らく主張してきたウォロディミル・ゼレンスキー大統領は、「ウクライナ軍には現在、ロシアが占領しているすべての土

地を解放する力がない」と認めている。最近のギャラップの世論調査によるとウクライナ人の約 52% (2023 年にはわずか 27%だった)が、戦争の早期の交渉による終結を支持している。

ウクライナ人は戦争に疲れているが、ロシアにも問題がある。ウクライナとその同盟国は、ロシア軍の死傷者は約 70 万人と推定しており、ロシアの軍事装備 14000 点以上が破壊されている。1 日平均約 1500 人以上の死傷者と大量の兵器損失は、持続可能ではない。

プーチン大統領は戦争に莫大な資金を投入しているにもかかわらず、設定した戦争目的を達成していない。つまり、非ナチ化(キーウを奪取し、ゼレンスキー政権を打倒し傀儡政権を樹立すること)、非軍事化(ウクライナ軍を解体すること)、ウクライナを支配下に置くこと(少なくともルハンシク、ドネツク、ヘルソン、ザポリージャの 4 州を占領すること)を達成していない。そして、ロシア経済も戦争の継続が難しい状況になりつつある。

このような両国の状況において、戦争は 2025 年 2 月 24 日で 3 年が経過する。努めて早い時期の終戦を主張するドナルド・トランプ米大統領などの動きもあり、戦争終結の動向が注目される状況になっている。

1 ウクライナ戦争：3年間の振り返り

筆者はウクライナ戦争を6段階に区分して説明している。戦争の初期にはウクライナ軍が主導権を確保して攻撃を行い、優勢な時期もあったが、戦争が長引くにつれてロシア軍が底力を発揮して戦いを有利に進め、現在に至っている。

第1段階は「戦争開始初期：ロシアが首都キーウを奪取しようとした段階」で、期間的には2022年2月24日から同年3月末まで。ロシアが電撃戦により首都キーウの奪取を目指したが、大きな損害を被り失敗し、キーウ正面から撤退した。

第2段階は「ロシアがキーウ奪取ではなく、ドンバス2州の完全支配に移行した段階」で、期間的には2022年4月初旬から同年8月末まで。ロシア軍がドンバス地方の2州（ドネツク州、ルハンシク州）の完全占領を目指した。

第3段階は「ウクライナ軍の攻勢作戦が大成功した段階」で、期間的には2022年8月末から同年12月末まで。ウクライナ軍は2022年8月29日に南部戦線のヘルソン州において大規模な反攻を開始し、ドニプロ川右岸のロシア軍を排除した。また、東部戦線においても、ウクライナ軍は同年9月6日以降、ハルキウ州におけるロシア軍の配備所弱点を衝いて電撃戦を行い、広い範囲を奪還した。

第4段階は「2023年冬のロシア軍の攻勢の段階」で、2023年1月から5月末まで。バフムトを焦点にしてロシア軍の攻勢が継続した。

第5段階は「2023年夏のウクライナ軍の攻勢の段階」であり、6月から10月末までだ。ウクライナ軍がザポリージャ州とドネツク州で反攻作戦を実施したが失敗した。

第6段階は「2023年末からロシア軍の全正面における攻勢の段階」で、2023年11月から現在（2025年2月初旬）まで。

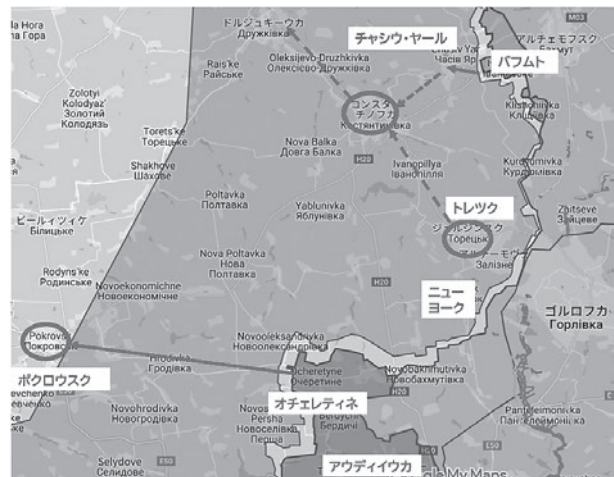
2023年の夏の反攻作戦が失敗したウクライナ軍は、ロシア軍の攻撃に劣勢になっていった。とくに2023年9月中旬から2024年4月末まで、米国下院がウクライナ支援予算を承認しなかったことは大きな打撃となった。ウクライナにとって2024年の冬は厳しい時期で、人員不足、弾薬不足に苦しみ、要塞網の構築を始めたばかりだった。この時期、ロシアが主導権を握っていたが、多くの専門家は「戦況は

膠着状態にある」と表現していた。

戦況の大きな転機は、ロシア軍がドネツク州の要衝であるアウディイウカ（図1参照）を2024年2月末に奪取したことだ。当初、アウディイウカを奪取されても、その後のロシア軍の攻撃は進捗しないだろうという楽観的な主張があった。しかし、アウディイウカを奪取したことに自信を持ったロシア軍の攻撃は進捗していった。

ロシア軍は、とくに東部戦線において主導権を握り、大きな犠牲を払いながらも攻勢を継続している。アウディイウカを奪取以降、ロシア軍がとくに重視をしているのは①バフムト西側の要衝チャシウ・ヤール（Chasiv Yar）の奪取、その後のコンスタンチノフカ（Konstantynivka）の奪取、②オチェレティネ（Ocheretne）方向から攻撃してポクロウスク（Pokrovsk）の奪取、③トレツク（Toetsk）の奪取だ。トレツク攻撃はチャシウ・ヤール方向からの攻撃と連動してコンスタンチノフカを目指す包囲作戦の可能性がある（以上、図1参照）。

図1：ロシア軍が重視する東部戦線の要衝



出典：Ukraine Control Map を基に渡部が作成

ロシア軍は、非常に大きな犠牲（1日に1000～1500人の死傷者、多くの戦車等の破壊）を払って攻撃している。ウクライナ軍の前線は崩壊していないが、2月初旬の段階で要衝ポクロウスクの直前まで迫っている。

2 ウクライナ軍の乾坤一擲のクルスク奇襲作戦

(1) ハイリスク・ハイリターンの作戦

ウクライナ軍は2024年8月6日、同国北東部のスームィ州から国境を越えてロシア西部のクルスク州に奇襲作戦を開始し、約6カ月が経過した2025年2月初旬時点でも占領地域を保持している。ウクライナ軍は当初、6個の旅団と数個の独立大隊、複数の支援部隊から構成される大部隊で攻撃を行った。

クルスク奇襲作戦は、「ハイリスク・ハイリターン」「乾坤一擲（運命をかけて、のるかそるかの大勝負をすること）」の奇襲作戦だ。つまり、ウクライナにとって厳しい戦況を劇的に好転させる可能性があるが、大失敗する可能性もある大胆で向こう見ずな作戦であった。しかし、ウクライナがクルスク奇襲作戦を行ったことは理解できる。政治的にこの奇襲を行わざるを得なかった事情があったし、作戦・戦術的に短期的な成功の可能性があったからだ。もし、ウクライナがこの奇襲作戦を行わなかったならば、「ジリ貧」のまま常に受動的で苦しい状況がずっと継続していたであろう。

(2) クルスク奇襲作戦の目的

クルスク奇襲作戦の作戦目的（なぜ攻撃したか？）を考えてみる。ウクライナ当局は当初、作戦目的を明確にしていなかったが、ゼレンスキー大統領は2024年8月18日のビデオ演説で「国境付近からのロシア軍の攻撃を防ぐため、緩衝地帯（バッファゾーン）をロシア領土に設定するのが目的だ」と明言した。

緩衝地帯の確保は確かに理解しやすい作戦目的であるが、その他にも以下のような複数の作戦目的も考えられ、実際にはウクライナの要人はそれぞれの作戦目的に言及している。

①戦争の主導権を取り戻す。

2023年11月以来、ロシアが1200kmの戦線全体の主導権を握っていたために、ウクライナ国民とウクライナ軍の士気は低下していた。主導権の奪還はその士気高揚のためにも必要だった。実際、ウクライナ軍は、クルスク攻撃により、前線の一地域で戦場の主導権を握り、ロシアの戦域全体の主導権に対抗する形を作った。

ドネツク地域で戦っている兵士たちは、「ウクライナ軍のロシアへの侵攻に勇気づけられた」と語っているし、大多数のウクライナ国民は「この作戦により士気が高揚した」と言っている。

②ウクライナ東部の激戦地区（アウディイウカ正面のポクロウスクとバフムト正面のチャシウ・ヤールやトレツク）のロシア軍部隊を引きはがし、クルスク州に転用させる。

これはウクライナ軍総司令官シルスキー大将が言及している。この部隊転用により、ロシア軍のウクライナ東部での作戦を失敗させることが目的だ。しかし、ロシアが多くの部隊を激戦正面から転用した形跡はほとんどない。ロシア軍はウクライナ東部の重要都市ポクロウスクに迫っており、クルスクへの新たな攻勢がモスクワに戦場の他の場所での攻撃の縮小を促すというウクライナの目的は達成されなかった。

③将来の停戦交渉を見越して、ロシア領土を占領し、占領地域をバーターとする。このバーターは、土地だけではなく捕虜も交換材料に含まれる。

④戦争をロシア領土に直接持ち込むことにより、ロシア国民に戦争をより深刻な形で実感させること。ロシア国民の不安や恐怖を煽ることで、不安定な状況を作り出し、プーチン氏の指導者としての不適格性及びロシア軍の防衛態勢の失敗に国内外に明らかにする。

⑤プーチン大統領が主張するレッドライン（超えてはならぬ一線）は単なる脅しであり、実際には存在しないことを内外に明示すること。

プーチン氏は「ウクライナ軍がロシア領土を攻撃することはレッドラインだ」と言ってきた。実際、ウクライナの国境を越えた攻撃後も、プーチン氏が警告した第三次世界大戦や核戦争が生じなかった。

(3) クルスク奇襲作戦の概要

攻撃が開始された当初、世界の多くの軍事専門家が「この奇襲作戦はリスクが大きすぎる」と批判した。なぜなら、ウクライナ東部の要衝でロシア軍の攻撃が徐々にではあるが進捗し、ウクライナ軍を苦しめていたからだ。とくにアウディイウカ正面のポクロウスク付近、バフムト正面のチャシウ・ヤールやトレツクでは、ウクライナ軍は危機的な状況に